2011 年　7 月 6 日・「京都新聞」では

50 年の京生活エッセー集に

北区の女性　温かい文章で表現

京都の日々の暮らしや身近な風物などを丁寧に観察したエッセー集を、関西詩人協会会員で 76 歳の主婦がこのほど出版した。南丹市美山町で生まれ、京都市内に出て 50 年余。人生の一コマ一コマを、故郷や人との触れ合いを大切にしながら、心温まる文章にまとめている。

京都市北区上賀茂の名古きよえさん。本の表題は「京都・お婆さんのいる風景」（B6 判、247ページ）で、三章計約 60 編をつづっている。

「故郷を出て五十余年」では、生家の思い出などに触れる。「急にアレルギー体質になり…母は塩分抜きの食事を作り、蝦（まむし）の粉を食べさせる」と高校生時代を振り返る。大学入試の面接では「日頃父が口にしていた『登る道は幾通りもあるが頂上は一つ』と言う意味のことを答えた」と記し、その父親は在学中に亡くした。

「西陣の早春」では「（学生時代に）アルバイトで端縫いの仕事を紹介してもらい…どの家からも機織りの音が聞こえた」と懐かしむ。「蛍（ほたる）が来た」「コオロギと子供」などに季節感があふれる。家族、詩人仲間、町の人々との交流も著者の宝物のように描かれている。

京都市内の印刷会社で長年、本の編集にも携わった名古さんは、これまでに詩集 5 冊、詩画集 2 冊を出している。エッセー集は初めてで「人との触れ合い、自然とのかかわりを深めて心が豊かになっていけば…」との思いを込めている。

（井上年央）

と紹介されています。